

特別寄稿 南島と太平洋のシャコ貝製斧

Tridacna Shell Adzes

in the Ryukyu Islands and the Pacific

高山 純

1はじめに

1976年、沖縄県立博物館に於て私は南島出土のシャコ貝斧を実見する機会を得ると共に、新田重清氏より、他にも類例のあることをご教示頂いた。今回、同氏より原稿の依頼を賜り、そのテーマを考えていた矢先、同氏より惠贈された南島考古第4号に貝斧の資料紹介が大浜永亘氏によってなされているのが目にとまり、しかもその上、幸運なことには知念勇氏が上京されお逢いする機会にめぐまれた。そこで、知念氏に上記雑誌の写真は印刷上あまり鮮明でないため、より鮮明な写真の入手をお願いした所、早速、石垣島に出張の折、すばらしい写真を送って下さった。撮影の機会を与えて下さった大浜永亘氏、ご多忙中にも拘らず、写真を撮影し送って下さった知念勇氏に対し、心からお礼申し上げる次第である。

また、新田氏にも同博物館所蔵の資料について、同様の労をとって頂きました。深謝します。

なお、本稿では南島の貝斧について充分な資料集成はなされていない。この点については、沖縄の考古学者に是非お願いしたいと切望している。

本稿は単に南島出土のシャコ貝製貝斧が、如何にオセアニア考古学に於て注目すべき遺物であるかを指摘するに過ぎない。本来なら貝斧と密接な関係のある石斧についても触れなければならないのであるが、紙数の関係で簡単に言及せざるを得なかった。石斧については別に発表の予定である。

2. オセアニアの貝斧

曾て八幡一郎氏はミクロネシアの等貝製円ノミの研究をなされた折、ここでは利器の大部分は貝製であるとして、ここの人々は最近まで貝器時代を作つて居たということが出来る、と述べられた（1943：69）。この当否は扱置くとしても、オセアニアの人々が貝製品を盛んに用いていた。あるいはいることは考古学的、民族学的資料がよく示している所である。このことに関してはJ・Poulsen（1970：33-46）のかなり纏った論文が発表されている。彼はこの中で貝製品道具と装身具に大別し、更に前者10項目、後者を28項目に細別し、各々の分布を列記している。大体の様子を知る上には参考になろう。貝斧と貝製丸ノミについては次のように記している。

- 1 貝斧 (shell adz) : ポリネシア・アウトライアを含むミクロネシア、ソロモン諸島、ニューヘブリデス、フィジー、メラネシアのポリネシアン・アウトライア、トンガ
 - 2 タケノコ貝製丸ノミ (Terebra gouge) : マリアナ・カロリン両諸島、ミクロネシア、ニューエーブリデス
 - 3 イモ貝製丸ノミ (Conus gouge) : ニュー・ヘブリデス
- 2については、最近、篠遠喜彦博士 (Sinoto 1975:159) がソサエティにおいて発掘され、また3についてはトンガのトンガタブからも発掘されている (Poulsen 1968:87) のみなら

ず、ガタルカナルからも発見されているようなもの（Davidson 1971:69），実際の資料は更に多いと思われる。

その他の貝としては、ラクダ貝製ノミがニューヘブリデス（Garanger 1972:107）から、トウカムリ貝製ノミがオセアニアの各地から発見されつつある。後者は将来、大いに注目される遺物となるであろう。この点については、目下、作成中のトラック諸島の報告書の中で詳述する予定なので、ここでは割愛する。

オセアニアのシャコ貝製斧の分布

シャコ貝（Tridacnidae については、Rosewater 1965:347-396を参照せよ）製斧（adze）は、オセアニアでは最も広い範囲に亘り分布している貝斧で、ミクロネシアのヤップからポリネシアの北部クック諸島まで点々と見出される（Davidson 1971:56）。ハワイやマルケサスにこれが認められないのは、これらの地域には、この種の貝が生息していないためであろうといわれている（Poulsen 1970:35）。次にその分布状況についてながめてみたい。民族誌的資料と考古学的発掘品は一緒に列記する。

ミクロネシア

マリアナ（多数の文献があり、代表的なものとしては、Thompson 1932:53: SPoehr 1957:151-4; Takayama et al. 1976:19-20），ヤップ（Gifford & Gifford 1959:185-9），パラウ（八幡 1943:135-143; Osborn 1966:451-7; 国分 1955:11-3など），トラック（LeBar 1964:7-9; Takayama et al. 1973:48 など），ポナペ（Christian 1967:399; Hambruch 1936:53-4 など），クサイ（Finisch 1893:470-2; 村主 1943:72; 76-7 など），マーシャル（Finisch 1893:410; Krämer & Nevermann 1938:134-144; 八幡 1943:141），ヌクオロ（Davidson 1971:58-69），カピングガマランギ（Buck 1950:165-8）。カロリン諸島については、その他 Eilers 1936:237; Damm 1938:320などを参照のこと。ナウル（Hambruch 1915:76），オーシャン（Lampert 1968:12-3），エリス（Kennedy 1931:288-293）などである。

ポリネシア

ギルバート（Davidson 1971:58），トケラウ（Davidson 1971:58），トンガレヴァ（Buck 1932a:186），マニヒキ（Buck 1932b:142-3），クリスマス（Emory 1934:21），ツアモツ（Emory 1975:108-111），トンガ（Poulsen 1964:193; 1967:231-4; 1968:87; Roger 1974:322）などである。

メラネシア

ニューヘブリデス（Shutler & Shutler 1965:11-12; 1975:74, 76; Garanger 1972:103-109），ティコピア（Firth 1959:Pl. 16），レンネル Birket-Smith 1956:91; Chikamori ed. 1975:19），アヌタ（Patrick, Kirch & Rosendahl 1973:68-77, 102），ベロナ（Poulsen 1972:196, 224），ブカ（Specht 1969:287-8），ブーゲンビル（Rolston 1945:212-7），アドミナリティ，ニューブリティン，ソロモン，バンク（Edge-Partington 1895:83, 84, 97, 120, 121, 132），

サンタクルーズ、リーフ (Davidson 1971:58), フィジー (Gifford 1951:220; Thompson 1938:100-101) などである。

オセアニアの貝斧の研究

上記の資料からも明らかのように、一般にシャコ貝製貝斧の最も盛行した地域はミクロネシアであるといわれている。メラネシアでもシャコ貝は貝斧にも用いられるが、むしろ装身具や貨幣としてのビーズや環に使用される方が一般的で、この点においてミクロネシアとは著しい対象をなしている (Poulsen 1970:35)。Poulsen はこの現象を「文化的選択」(Cultural Preference) の好例の一つにあげている。

ミクロネシアはその語源が示すように多数の小さな島々、特に石斧の材料となる石のない環礁が沢山ある。これら環礁に居住している人々が、シャコ貝製貝斧を石斧の代りに製作することは、一見当然の成行きのように思われる。しかし、問題はそう簡単に説明出来ないところにある。

というのは、石斧をつくる上に都合のよい玄武岩などが豊富にある東カロリンのトラック、ボナペ、クサエなどにもこれらを用いた石斧は存在せず、全て貝、特にシャコ貝製貝斧が用いられているからである (Finsch 1914:120-1)。実際、これら「高い島」(high islands) を訪れた者は、これら原石がいたるところにころがっておることに気付くであろう。そして、投弾などはこれらの石を用いてつくるのが一般的であり、西カロリンで貝斧を用いるのは、一種の文化的伝統に根ざしたものであったと思われる。但し、私達は1975-6年にかけ1ヶ月間行なったトラックのチェックエヌ貝塚では、1個の安山岩製石斧とノミを発掘している。これがここでつくられたものか、石斧の存在するパラオ、ヤップ方面から将来したものかどうか目下、断定出来ないでいる。というのは、トラックは所謂オセアニアの安山岩線に含めるという意見と含めないとする意見が対立したまま地質学者の間に存在していることと、類例がミクロネシアにはまだ発見されていないからである。

貝斧の登場ないし存在が地質的環境に左右されることは当然のことである。この点についてGreen は次のように述べている。「ミクロネシアにおける貝の使用は、その地域の環境的制約の結果のように見える。実の所、ミクロネシアの様子は、東南ソロモン群島の外圏の島嶼地域をバンクス＝ニューヘブリデス諸島グループにおける貝の使用と大変似ているかもしれない。ここでは大なる程度まで、それは適当な岩石のタイプの全くの欠如によって、所々だけであるが強められたところの一つの確立した文化的伝統のように見えるのである。確かに、Davidson (1971:68-9) が示しているように、オセアニアの一部における斧に貝を用いることは最早や簡単に環境的要因に帰することは出来ない。(しかし) トンガを除く、大部分の熱帯ポリネシアでは逆で、種々のオセアニック岩、またはシャコ貝 (*Tridacna maxima*) のちようつかいの部分よりもむしろ腹部の縁が集中的に用いられており、このことはある程度環境的制約を反映しているかもしれない。要するに、安山岩線を横切り、地質学者の言うオセアニック島世界に入って来たポリネシアの最初の植民者達は、幾分制約された一組の適当な岩石のタイプに遭遇したのであるが (これはそれまで石斧をつくるにあたり大いに無視してきた大陸的同等物であった)、ミクロネシア的方法と同様に初期のメラネシア的方法に従い、より大きなシャコ貝のちようつかいの部分に一層たることが、特に容易に出来るこ

とではなかったため、今やオセアニック岩の種々のものを利用せざるをえなくなったのである」と (Green & Davidson 1974:142-3)。

石斧と貝斧の併存している島として、Golson (1972a:24) は、ヤップ、ニューカレドニア、ニューヘブリデスのある種の島々をあげているのであるが、上記の貝斧の分布のところを見て頂ければ判るように、環礁を除く所謂「高い島」では、カロリン群島を除き、他にもかなりある。この両者併存の状態は貝斧の起源をさぐる上で重要な鍵をにぎっているといえよう。

オセアニアの最古の貝斧

発掘された貝斧を記述するにあたり、各報告者達が異口同音に述べていることは、石斧に比して貝斧の研究があまり盛んに行なわれないで来たことである。

その最大の理由は、貝斧はその材料の制約から、ヴァリエイションに乏しいと考えられていたことである。他の理由の一つは、層位的発掘に基づく資料が貧弱であったことかもしれない。

しかし、近時 Poulsen (1970:36) は、ミクロネシアの貝斧は石斧とタイポロジカルな関係がないという考え方を受け入れることは出来ないと述べ、更に石と貝では、斧をつくるのにどちらが容易か、また、石斧よりも貝斧の方が再度鋭くするのに早いかどうかを知るために、所謂実験考古学の必要性を主張している。正に至当な見解であると思う。オセアニアや南島の貝斧が一元的か多元的発生によるものかを究明する上に、少なくともなされなければならない基礎的研究の一つであろう。

なお、この点について、参考までに述べるならば、石斧と貝斧の用いられたパラウでは、貝の方が容易に加工出来ると言われている。何故ならば、まっかな木炭のような熱の応用で、全体をいためないで、局部的に剥片にすることが出来るからであるという (Osborne 1966:31-2)。興味深い報告である。

石斧と貝斧のタイポロジカルな研究の代表的なものを次に紹介しておきたい。

一つは Green の研究である (1972:679-681)。氏によれど、ポリネシアにおいて最も基本的石斧の形態の一つに平らな底を平凸の断面をもつものがある。これはフイジー、トンガ、サモア、マルケーサス、ソサエティの初期の組合せに共通して見られる、最も重要なタイプの一つである。そして、これはニュー・ヘブリデスやフィリピン、それにムクオロ（但しここでは後出）の同様に古いコンテクストに属するシャコ貝ないし他の貝製斧に密接に関連しているように見えるという。そしてこれはミクロネシアに広く見られる形式であると共に、メラネシアの他の所では石斧に見られるのであるが、その起源は不明であると論じている。

他の一つはハ幡氏の研究である。氏はパラウの貝製尖斧を中心に、ミクロネシアにおける類似の貝斧を取り上げ、この型式の石斧はハイネ、ゲルデルンがインドネシアの新石器文化最盛期の所産と考えた所 Spitzbeil に系統的に連なり、パラウにおいてはたとえ同じものが発見されていなくとも、マリアナと共にこの島には石斧も存在することから、ここで石器から貝器に移行したのかもしれないと推論された (1943:142-3)。

インドネシア方面の尖斧については後述する予定であるが、オセアニアの尖斧 (beaked adze) については、Davidson (1971:68) は次のように述べている。「尖斧とカーブしたカッティン

グ、エッジをもつ変種は、ミクロネシア全域を通じ、またメラネシアの中でも再び起るタイプとして同定することが出来る。尖斧はパラウ（Osborne 1966:456-7）からギルバート諸島（オークランド博物館収集品）、少なくともメラネシアの縁からの例（Hambruch 1908:Pl. XX11）から証明されている。ムクオロの例はこのトライディンジョンに属するよう見える。これらのある種のポリネシアの石斧に対する機能的類似は明らかであるが、しかし歴史的親縁関係は、たとえあっても、知られていない」と。

なお、詳しくは後に述べるが、太平洋における貝斧の起源地としてはフィリピン南部がその発見によって有力視されるにいたっている。Golsonはこの点について、「B.C. 2000年より古いシャコ貝製斧のフィリピンのパラワンにおける最近の発見は、東南アジア大陸部の先史時代の遺跡における豊富にして種々様々に変化した貝インダストリーと同様に、石に対しての選択ないし代用としての貝の使用が、南太平洋の植民に先立ってなされていたことを確実にしている」と述べている。

フィリピンにおけるシャコ貝製斧の発見は、戦後の太平洋考古学におけるハイライトの一つであった。例えば、メラネシア考古学の権威であるR. Shutler博士は、これは太平洋において普遍的に見られる諸タイプの祖型ないし、関係あるものかもしれない」と述べ（1967:80），ポリネシア、ミクロネシアで活躍しているJanet M. Davidson嬢は、これは古来性及び西太平洋における貝斧の伝統についての広い分布に対して、ヒントを提供していると論じられている（1968:62）。

話が少し横にそれたので、再びオセアニアのシャコ貝製斧の様子について、もう少し述べてみたい。

貝斧のみ扱った論文としては、前記の八幡一郎教授の「パラウ島の貝製尖斧」と題するものが古くから著名である（1943:135-143）。その他、Garanger（1968）のものがあるらしいが未見である。ミクロネシアのものに関しては、Rosendahl（1969）のものがある。彼はホノルルのビショップ博物館所蔵のミクロネシアから入手された156個の貝斧を貝の種類に基づき14型式に分類し、そして更に形態に基づき亜型式を設定している。その他、貝斧の分類は、それが発見され、扱っている各報告書中に、大概詳しく記述されている。特にこれらの中で注目すべきものは、ヌクオロの貝斧の報告中に見られるDavidson（1971:52）の記載で、彼女は機能上からの分類の必要性を説いている。

一般にシャコ貝製斧の分類は、シャコ貝自身の用いられる部分より2大別される。一つはその腹部のまわりを用いたもの、他の一つはその中央部ないしちょうつがいの部分を用いたものである。前者の場合は、用いられるシャコ貝は小さく薄く、従って出来上った斧の形態にはあまり差異がない。これに対して後者の場合は、用いられるシャコ貝は大きく肉厚のため、石と同じように種々の形態をした斧をつくることが可能である。

面白いことには、これら両形式とも、決して、殻表の強大な放射肋に沿って切り取ることではなく、必ずそれに略直角に交わるように切り取られているということである。こうしないと材質的に弱いためかもしれない。従って、国分直一先生（1973a:25）が屋根型石斧のプロト・タイプとして考えられたシャコ貝のひだの低い部分を切断し、高い稜の部分を残してつくったという貝斧というものは、オセアニアには存在していないし、着想としては面白いのであるが、やや支持し難い。

そこで次に考古学的に発掘された古いシヤコ貝斧について簡単に触れておきたい。詳しく知りたい方は、前述の分布の所で述べた文献にあたって頂きたい。

最近の発掘の結果、オセアニアにおける貝斧の出現時期は非常に古く遡り、しかもこの現象はメラネシアに著しいことが明らかになりつつある。

つまり、少し前まではニュー・ヘブリディズのシヤコ貝製斧は9—15世紀に比定されていた(Shutler 1970: 135—7)のであるが、トンガ、フィジー、ガタルカナル、そしてブカ島では2—3000年も前に遡ることが示唆されているという(Davidson 1971: 69)。但し、これらの資料のうち、トンガとフィジーのいくつかのものはシヤコ貝のちようつかいの部分を用いてつくられたものであるが、他のトンガのものとガタルカナルのものはイモ貝製であり、ブカのものはトウカムリ貝製である。

最近、貝斧の古来性を示唆する資料は増加しつつあり、北部ニューアイルランドのレサからB.C. 500年に比定されるラピータ式に類似した土器に伴ないシヤコ貝製斧(axe)が発見され(Shutler 1975: 61)，またニュー・ヘブリディズのエファテ島のエルエティでもラピータ式土器とマンガアッ式土器に伴なってシヤコ貝製貝斧が発掘されている(Shutler 1975: 67)。この年代はB. C. 350年と考えられている。その他、ポリネシアン・アウトライナーの居住しているソロモン諸島の東南に横たわるアヌタでも無文土器と共にシヤコ貝のちようつかいの部分を用いてつくった貝斧が、少なくともB. C. 5世紀と思われる文化層から検出されている(Black & Green 1975: 15—7)。

興味深いことは、西ポリネシア・メラネシアでは貝斧は、ポリネシア人の起源を探る上に重要な鍵をなぎっていると考えられているラピータ式土器に伴なっていると見做れつつあることである(Bellood 1975: 13)。もしこの見解が正しいとするならば、最近の発掘などによって明らかになりつつあるラピータ式土器がB. C. 1500—2000年まで遡るということから考え、これらの地域における貝斧出現の時期は一層古くなることが予想されるのである。

ミクロネシアにおいては、著しい発掘調査のおくれのために最古の貝斧の様子はあまりよく判っていない。

Spoehr (1957: 174)によれば、マリアナ最古の「マリアナ赤色土器」に伴なって貝斧が伴出しているというのであるが、報告書の記載が簡単で詳しいことは判らない。ただし、Figなどから検すると、腹部のまわりを用いたものらしい。その後、Pellettはテニアンで発掘し、この土器に伴出したシヤコ貝(?)斧を図示しているのであるが、略図で貝のどの部分を用いたものか判らない。この種の土器の¹⁴Cの測定値は1527±200 B.C.である。しかし、私の発掘から検するにこの年代は一寸古すぎる気がする。というのは、私達の発掘したロタ島のM-13遺跡の最下層である第IX層の年代は不明であったが、第VIII層の¹⁴Cの測定値は640±85 B.C.でこのタイプの土器を伴出していた。シヤコ貝製ノミは第IV層の同じタイプの土器と伴出した。第VI層は510±85 B.C.で、第III層はA.D. 690±80を示していた。従って、この遺物の帰属時期はこれらの年代の間に位置するであろう。これは腹部のまわりを用いてつくられていた。

パラウについては年代のはっきり判る資料の報告はない。ヤップではマリアナと同じく腹部のまわりを用いたものが一般的であり、Gifford夫妻は、ヤップのものはマリアナのものに類似し、

松村瞭（Matsumura 1918 : fig. 30）の図示したカロリンのものとは形において似ていないと述べている（Gifford & Gifford 1959 : 200）。Thompson (1932 : 54)によれば、マリアナ諸島で採集されたちようつかいの部分を用いてつくられた大きな厚いタイプの貝斧は、歴史時代にグアムとサイパンに移住して来たカロリン群島の人々によってもたらされたものであるという。確かに、現在までの所、カロリンで一般的なこの種の貝斧が「マリアナ赤色土器」に伴出した例はないようである。しかし、私達のトラック諸島のトール島の発掘は、時期的には新しいか。この地において両形式の貝斧が用いられていることを明かにしているのでThompson の意見が全く正しいということは出来ない。

ミクロネシアではヌクオロで重要な発掘がなされている（Davidson 1971 : 68）。ここでは A.D. 1300年という最古の文化層に伴ってシヤコ貝の腹部を用いた貝斧が発見され、ちようつかいの部分を用いてつくられたものは、年代的に後出であることが判明している。

要するに、オセアニアには両形式のシヤコ貝製斧が分布しているのであるが、メラネシア及び西ポリネシアの最古の貝斧はちようつかいの部分を用いて製作され、ミクロネシアではこれに対して、腹部のまわりの部分を用いてつくられた。という傾向が、現在の資料からは看取されるといえるかもしだれない。しかし、今後のミクロネシアの発掘の結果、この傾向は変更する可能性のあることを付記しておきたい。私はオセアニアに広く分布しているシヤコ貝製斧は、その環境から各地において偶然に独立して生まれたものではなく、系統的には一元的なものであって、ある特定の地域から、その手法が各地に伝播したのではないかと推定している。特に腹部のまわりを用いてつくる貝斧はその蓋然性が極めて高いと思っている。この二形式の貝斧の存在が地域的あるいは時間的差異に基づくものなのかということの解明がなされるのも、最近のオセアニア考古学の進展の度合からながめると、最早、時間の問題であるといえよう。

今やオセアニアのシヤコ貝製斧は、オセアニアの人々やその文化の移動経路や起源をさぐる上で重要視されなければならない時期に来ているといえよう。ここで、Davidson (1971 : 68) の言葉を紹介しこの章を終ることにする。

「オセアニアにおける貝斧の広い分布は、その古さを示しており、また石斧をつくるのに適した石のあるようないつかの島々においても、これらが流行しているということは、この使用が、民族学者達がかって気付いていたように、時折、文化的選択によって決定され、単なる環境的必然性によるものでないことを示している。

フィリピン・南島の貝斧

フィリピンのパラワン島のドゥヨン洞窟からシヤコ貝製斧が発見された。ここでは前期新石器時代の埋葬男性成人骨が発見されたのであるが、その体の西側には1個の大きな磨製石斧兼ノミと4個のシヤコ貝製斧が、貝製耳飾とペンダント共に副葬されていた。また、脚の近くからは6個の内部に石灰の入った、びんろう子をかむのに用いる石灰入れ容器と考えられている。アナグラ貝製品が発見された。その他、地表面と亜地表面の間の厚い層からもシヤコ貝製置物と大きな丸ノミの一部が発見されている。この遺跡から発見された炉址のような所からの木炭の¹⁴C測定値はB.C. 3730±80を示していた（Fox 1970 : 62-5）。

R. Fox 博士によれば、ピプウン岬のバト・ブリ洞窟から 2 個の同一の貝斧が埋葬址から発見されたし、ドゥヨン洞窟の北 250 キロの所にあるエル・ニドのランジェン島のパレスデス岩蔭における新石器時代の人骨にもシャコ貝製品が伴出していたという。また、南スルー諸島のタウイ・タウイ近くのサンガ・サンガ島の洞窟からも 4 個の貝斧が発見されている。この出土品はドゥヨン洞窟の新石器時代のアセンブリッジに結びつくといわれている。

これらのことから、Fox 博士は「最も遠い南フィリピン、特にスルーとミンダナオ、の将来の発掘は、シャコ貝製品を伴なう他の遺跡を必ず生み出すであろう。ベイヤーの初期の見解つまり、後にフィリピンから太平洋へなされた主要な人々の移住は、ルソン島からであったのは、最近のパラワン島の発掘品から見た場合、確実に変更されねばならない。パラワンのシャコ貝製品は、ミクロネシアで発見される貝製品の型式と極めて密接な類似を示しているからである」と述べておられる。

なお、私がマニラの博物館で J. P. Peralta 氏のご好意により実見することの出来たパラワン島出土のシャコ貝製斧の印象は、ミクロネシのものとは似ておらず、むしろ、新田重清氏に見せて頂いた石垣島のものに酷似していた。パラワン島のものは大きなシャコ貝のちようつかいの部分を用いて製作されており、この部分を用いたシャコ貝製斧はミクロネシアにはない訳ではないが、このものは表面がより丁寧に磨研されている。しかし、使用された貝の部位から必然的に生ずる断面形ではあるが、フィリピン（むしろ南島のものにより似ているのであるが）のものに似た類品は Rosendahl のミクロネシアの貝斧の分類中の第 XI 型式に求められる（1969：16）。また、形態的には若干異なるが、シャコ貝の同じ部位を用いたものは、ポナペのナン・マタール遺跡からも出土している（Christian 1967：398）。ミクロネシアではこの種の貝斧は発掘例がないため時期の決定は出来ないのであるが、トンガではラピータ式土器に同じような類品が伴出している（Poulsen 1966：Fig. 40）。尤も、Fox がその報告書中 Fig. 42 に示すドゥヨン洞窟出土のシャコ貝製スクレイバー（？）は、ミクロネシアのものに似ている。

1969 年、パラワン島の発掘に参加していた私は、Fox 博士よりパラウの発掘と一緒にどうかというおさそいを受けた。しかし、残念ながら未だこの計画は実現の運びとなっていない。来年はパラウで比較的大規模な発掘を私は行なう予定なので、フィリピンとミクロネシアとのシャコ貝製斧の親縁関係の有無はかなり明らかになると期待している。

フィリピン南部では、その後、Spoehr による発掘がなされ、シャコ貝製斧とマリアナ最古の土器と似たものを発掘している（1973：261）。ここからは B.C. 4700 ± 180 及び B.C. 5995 ± 190 という測定値が得られているのであるが、これらの年代が上記遺物に直接結びつかないのは残念である。なお、Solheim（1970：24）はサンガ・サンガ出土の貝斧と貝製丸のみは初期のラピータ式土器に伴出するものと似ていると述べている。そこで、トンガのシャコ貝製斧について再度ながめておくことにする。トンガのトンガタプの Pea 遺跡から Poulsen（1964：192, Fig. 40）によって、発掘されたものは、ちようつかいの部分を用いてつくられており、おお向けに寝かされた人骨の右肘から 4 種離れた位置から検出された。貝斧の特徴及びその出土状態は、フィリピンのパレデス岩蔭遺跡出土のものと似ていて面白い。トンガタプのこの貝斧の帰層時期は、¹⁴C の測定値 B.C. 820 ± 100 に比定出来る可能性があり、所謂ラピータ式土器に伴なっていた。

さて、次に南島のシャコ貝製斧についてながめてみよう。

国分直一先生によれば、南島島嶼群は、種子島、屋久島を中心とした北部圏、奄美諸島・沖縄諸島を含む中部圏、宮古、八重山の島嶼群を含む南部圏の三つの文化圏に分けられるという。

(1966 : 34)

南島において利器に用いられる貝の種類には、夜光貝の蓋、クロチョウガイ、ハマグリ(国分1972:429-430)、スイジガイの殻の突起部(多和田他1962:73)、それにシャコ貝である。なお、沖縄諸島中の久高島のシマシーヤーマ貝塚出土の貝器をPearson博士(1969:P1.3,a,b)は丸のみ(gouge)と記されているのであるが、国分先生は食器と見做している(1972:249)。

さて、シャコ貝は搔器として利用される例もあるが、一般にはアツズないしアックスとして利用されている(国分1971:416)。この種貝斧の分布は、中部圏の奄美諸島中の喜界島湾天神貝塚(国分他1959:Fig.15)、沖縄本島地荒原貝塚(多和田他1962:73)、宮古島(国分1972:63)、石垣島(Kokubu & Kaneko 1962:125; 大浜1975:71-82)などである。

これらの中で、典型的なシャコ貝製斧を豊富に出土するのが石垣島である。同島のものについては国分・金子エリカ両氏の資料紹介があり、注目されていたのであるが、今度、大浜永亘氏によって多数の貴重な資料が南島考古(第4号)に紹介された。前者の報告には断面図が示されており、シャコ貝のちようつかいの部分を用いてつくられているらしいことが推測されたのであるが、今度、知念勇氏が私のためにわざわざ撮影し、送って下さった写真を検討してみると、大浜氏の資料中にもこの種のものも含まれていることが判った。また、沖縄県立博物館所蔵の貝斧について写真をわざわざ撮影し送って下さったものも同じ部位を用いてつくられていることが明らかになった。写真と共に新田重清氏に次のような記事を同封して下さった。「出土地は石垣市名蔵の原野。貝は大シャコと思われ、殻頂近くの部分を加工したものとのようである。最大長15.1厘、最大幅5.6厘、最大厚3.6厘、重量310グラム」。

石垣島のこれらの貝斧は、オセアニアのちようつかいの部分を用いてつくられたものと非常によく似ており、特に、磨研の度合の少ない点で、フィリピンのパラワン島のものに酷している。国分先生がこの点に注目されたのは蓋し当然のことといえよう(国分1972:114)。今年、青柳洋治氏は『えとのす』6号の166頁にパラワン島ドゥヨン洞窟出土品を図示されておられるので、是非、南島考古第4号に掲載された大浜永亘氏のものとくらべて頂きたい。

ところで、彼我のものがたとえこのように類似していても、これらが系統的に関係があると断言するには、次のような問題が横わっており、慎重な比較検討が望まれるのである。

つまり、第一は年代の問題である。フィリピンの貝斧は、フィリピンの前期新石器時代(大略B.C.3700-2700)に属した。フィリピンにおける土器の出現は、後期新石器時代(大略B.C.1500-1000)と考えられている。従って、貝斧は土器出現以前のものと考えられていたのであるが、近時、青柳洋治氏(1973:86)は、1970年のフィリピン国立博物館によるスルー諸島の発掘では土器に貝斧が伴出していたという。この土器が如何なるタイプのものか不明であるが、上記の編年に従うならば、貝斧の使用は後期新石器時代まで降ることになる。また一方、もしこの記事が、既述のSpoehrの発掘報告と同一ならば、この土器は「マリアナ赤色土器」と密接な親縁関係があると考えられているフィリピンの赤色土器であることになる。Spoehrの報告書では、この土器がいかなる¹⁴C測定値を示すものか明確な記載はないようと思われるのであるが、Shutlerと

Marck(1975 : 94) は、 B.C. 4500 に比定している。

一方、南島の場合、シャコ貝製斧の発見される特に南部圏の考古学的編年はあまりよく判っていない。大浜氏の資料も石器製作技法や遺跡の性格などから新石器時代でもずいぶんくだる時期のものであろうというものであった。現在、私達の最も知りたいことは、南部圏（先島諸島）の「先土器新石器文化」といわれるものが、果して本当に Preceramic であって aceramic ではなかったかどうかということである。私の西表における遺跡踏査の印象では後者ではあるが、土器を伴出する遺跡も存在するのではなかろうか、というものであった。今後の調査の進展に大いに注目したい。最近、波照間島の下田原貝塚から B.C. 1310 ± 90 及び B.C. 18030 ± 100 という ¹⁴C の測定期が得られた（国分 1973 b : 26）。この年代については古すぎるという反論が提出されている（安里 1975 : 99）。南島考古学の専門家でない私にはこの点に関して、卑見を述べる資格はないのであるが、もし許して頂けるならば、フィリピンの考古学から見た場合、これらより古い年代が将来出る可能性があるといえよう。

第二の問題は、シャコ貝製斧に伴出する他の遺物、つまりアセンブリッジを比較した場合、殆んど一致しないということである。Spoehr の発掘は別にした場合、両地域の貝斧は土器を伴わないので、この点においては一致しているのがあるが、しかし、他の遺物については一致しないのではなかろうか。

国分先生（1972 : 114）は、シャコ貝製貝器、アナダラ属の貝輪、貝製の匙はわが南西諸島にも発見される。シャコ貝製の貝器（アックス・アッズ）と局部磨研石器とアナダラ属の貝輪は琉球の先島、特に八重山においてセットをなして発見される」と述べておられるのであるが、フィリピンのアナダラ貝の穿孔されたものは石灰を入れる容器であり異なる。また、両者で発見される局部磨研石斧は注目すべき遺物ではあるが、これを系統論に用いるためには、東南アジア全体におけるこの種石斧の綿密な比較が望まれるのではなかろうか。貝製匙はもう少し形態的に類似していると都合がよいのであるが、この程度の類似は各地において偶然に発生する可能性があるのでなかろうか。

勿論、国分先生が、南島先史文化の源流を東南アジア方面に求められた根底には、彼我の磨製石斧の類似という研究が有力な傍証になっていることは推測に難くない。

石斧の問題は本稿の目的からはずれるのであるが、貝斧の研究には不可欠の点であるため、若干触れておきたい。

国分先生によれば、南島において最も南方系かと見られる石器には、有稜石器があるという（1968 : 19 - 20）。

有稜石器は、周知の如く、Heine - Geldern (1932 : 570 - 572) が古く Spitzbeil と呼び、禰津正志氏 (1945 : 316) が「尖斧」と訳されたものである。禰津氏は「この石斧はマライ、東・西ジャワ、南スマトラに分布しているが、その源流はマライの刃部だけに稜のある磨製石斧から発達したものと思う」と述べている (1945 : 316)。一方、R. Duff 博士 (1967 : 3) は、スマトラから上海までいたる所で見られる柄のない、単純な断面矩形の石斧の推定される祖型から、マラヤでは Cutting edge をくちばしのように変形させた所謂 beaked adge がつくられ、一方、スマトラからジャワでは、これに関係のある Pickadge と呼ばれる、つまり、石斧の長軸に沿って中央

に稜線のある断面三角の特異な型式のものがつくり出されたのである。そして、この両型式の石斧は、この南西地域の新石器時代の最後の相につくり出されたもので、南中国沿岸の北東の源郷における有段石斧（stepped adze）^{フェイス}局部的発達と同時代と見做せるかもしれない、と述べている。その後、同博士は『東南アジアの石斧』と題する労作を発表されたのであるが、その中で、マレイのbeaked adzeとインドネシアのpick adzeをタイプ7に分類し、前者がスマトラやジャワのような隣接諸島に伝わらなかったことと、後者がまたマレイ半島と同半島内で交差することなく、しかもインドネシア内に限定された分布を有していたという事実は、この型式の石斧が新しい発達であることを示していると述べている（Duff 1970：15）。

インドネシアのPick adzeはスマトラとジャワ内でのみ普通であり、ジャワから小スンダ列島のバリ島のみ到達したに過ぎない。バリからの分布は、南セレbesを経て、ミナハサ半島で終っている。西南ボルネオの稀有な例は、恐らくバンカ島経由でスマトラから伝わったものと思われる。一方、マラヤのbeaked adzeの分布は、現在南タイ語を話す少数民族の北の限界と一致するライン上で急にストップする。

要するに、国分先生が南島のものと親縁関係があるらしいと想定されたインドネシアの有稜石斧は、インドネシア考古学からながめた場合、フィリピン・台湾までは北上していないと考えられている。この型式の石斧は、非常に特異な特徴を共有しており、もし仮に南島のものと親縁関係が存在するとなると、甚だ重要な問題となり得るもので、今後、一層詳細な比較分析のなされることが要望される。

尤も、既述の如く、オセアニア考古学でもbeaked adzeは注目されており、古く八幡一郎教授はパラウの貝製斧をインドネシアの尖斧に系統的起源を求められた（1943：135—143）。石斧が貝斧にかわったのは、今やフィリピンとなり、同教授の想定されたパラウではないような気配になってきた。しかし、フィリピンの代表的シヤコ貝製斧は底が平らな、平凸の断面を呈すもので（Green 1972：677），尖斧が貝にかわったのは、パラウでないという反証は未だなく、尖斧に限っていえば、同仮説はまだ否定されていないといえよう。シヤコ貝製尖斧のパラウ（Osborne 1966：456—7）からヌクオル、ギルバート、メラネシアの縁まで分布している（Davidson 1971：68）という事実は、南島にこれが伝播してきたということも全く考えられないことではないということを示唆している。今後のフィリピン、台湾、南島の発掘調査が、この点の触明に重要な役割を演じてくれるものと思われる。

次に南島のシヤコ貝製斧が、フィリピンのものと親縁関係にある可能性を示唆している根拠について述べておきたい。

南島、特にこの種貝斧を豊富に出土する石垣島においては、石器製作用の石材が豊富に産出され、砂岩、粘板岩、閃緑岩、輝緑岩、班禰岩製石器が存在している（国分 1972：266—7）。とすると、ここで敢えてシヤコ貝製斧をつくり出すということは、所謂環境的制約に基づくものでないことは明らかであり、換言すれば、シヤコ貝を用いてつくるという手法が外部から伝わってきた可能性の大なることを暗示しているといえよう。この点で残念なことは、石垣島における編年が確立していないため、シヤコ貝製斧をつくる手法が石斧製作手法と時間的にどちらが先かという関係が不明確なことである。このことは、国分先生のいわれる有稜石斧、正確には先生は有稜石器と記されている

のであるが、その起源の問題と大きなかかわりあいをもつてくるのではないかろうか。既に述べたように、国分先生は、この石器のプロト・タイプとしてシャコ貝に求められた。これに対して私は否定的見解を述べたのであるが、実は、私は南島の有稜石器、つまり有稜石斧は逆に南島において、シャコ貝製斧を模して製作されるようになったのではないかと考えてみる必要があるのではないかと思っている。

なお、南島出土の遺物中、オセアニアから将来された可能性の最も強いのは投弾であろう。国分金子両氏によれば、これは竹富島の廃屋址から採集されたもので、材質はサンゴ石で磨研されているという。また、地元の採集者によれば、往時は闘争に用いられたという（Kokubu & Kaneko 1962：129－130）。国分先生は、この論文以後、どうした理由からかこの遺物については触れておられない。他に類例の出土品のないことから、時期的に新しいものと考えられておられるためであろうか。

オセアニアに投弾は広く認められ、これは時間的表示（time-indicator）に有効ではないかといわれているくらいである（Spoehr 1957：137）。最近はマリアナでは「マリアナ赤色土器」に（Takayama et al； 1971：29），メラネシアでも古い文化層に伴出する事例が増加しつつある。世界の投弾の分布については、M. コルフマン（1973：85－94）の論文が発表されている。それによれば、南島に最も近い所では、朝鮮、フィリピン、南中国である。しかし、これらの地域の考古学的資料としては、南島に見られるような形態の投弾が検出されていないのではないか。サンゴ製であること、及びその形態において、これはマリアナ諸島のものに酷似している。ただ、マリアナ諸島では、ミクロネシアの他の地域と同様にこれは100年ぐらい前までは、普通に用いられていたようなので、今後、南島の先史時代の文化層から類例が出土しない場合は、それこそごく最近、これらの地域からもたらされたものであろう。

最後に今後、南島における南方的因素として可能性のあるものと、同一の環境により偶然各地において生まれた蓋然のあるものについて、たまたま私の目に触れたものについて付言しておきたい。

南部圏の外耳土器の起源について、国分直一先生は「台湾東海岸南部および、恒春半島沖の小琉球嶼の先史遺跡には近似の土器が見出される。しかし、台湾のそれの行われた時期が明瞭でない上に、八重山式土器の出現の時期もまだ明瞭でないので、直ちに両者を結びつけて考え難い段階にあるが云々、と述べられ（1968：13）その後、更に南部諸島の土器は台湾東海岸の巨石文化地方の土器に近似しているのであるが、八重山式土器が水平の把手を発達させるのに対して、巨石文化のそれは水平の把手をもつものもあるが、縦に橋状につけるものを発達させる。しかし、ある時期に八重山の先土器文化人が台湾の巨石文化の焼成技術を学んだものと見うる蓋然性は強いように思われる。と論じられた（国分 1972：427）。これは、張光直氏の報告された竜山類似文化中の土器（Chang 1969：94, Fig. 56, 5）に似ているのではないかろうか。アセンブリッジは一致していないようではあるが、大いに注目してよいのではないかろうか。その他、留意しておきたい遺物としては骨製尖頭器の出土である（玉口 1960：134）。この石垣島山原貝塚とやや似た遺物は台湾の鳳鼻頭遺跡から出土している（Chang 1969：Pl. 67, L, M, N）。勿論、この種骨器は南中国からも出土している（例えば、福建省博物館 1976：図 21, 27）。その他、山原貝塚出土のオトメイモガイ製の垂飾貝は一寸気にかかる遺物である。というのは、この種イモ貝製垂飾はオセアニアで

よく見られる遺物であるのみならず、フィリピンのドゥヨン洞窟から出土しているからである。フィリピンのものはアンボンクロザメ製である。Foxによれば、この種の耳飾は、今日でもルソン島の山地民の間で使用されているという（Fox 1970:62）。

国分先生は沖縄発見の貝製鏃の源流は、その製作技法、器形から見て台湾西海岸・江南の先史時代に関わりをもつものではなかろうかと、述べている。この見解は正しいように思われる。更に私は、神奈川県三浦市にある弥生時代の間口洞窟出土の貝製鏃（神沢 1973:11）も中国の先史時代の同種遺物と系統的関係があり、同洞窟出土の貝冠丁などと共にこれらの地方から稻作文化に伴って我国に渡来したものではないかと推測している（中国のものについては、例えば福建省博物館 1976:83-1191を参照せよ）。

なお、南島でよく見られる夜光貝の蓋の縁部を加熱した貝刀は、国分先生によれば、台湾南部の恒春半島、東海岸近くの火燒島に発見されるという（1972:429）。同じものはオセアニアではニューヘブリデスの先史時代の遺跡からも発掘されている（Shuttle 1965:Plates 1-A, 7-E）。ニューヘブリデスのものは偶然の一致であろう。

最後に、同一の地理的環境の結果、偶然に同じ形態のものが考え出された可能性の強いものあげると、アナダラ属製の貝錐があげられる。南島と同じものはオセアニアの各地で見出され、互に文化的系統はないのではなかろうか。

なお、Golson（1972b:580-581）は、南太平洋の貝の使用は、インドシナ先史時代の貝製品と系統的関係が存在するのではないかと指摘しているのであるが、これも偶然の一致の可能性が強いのではなかろうか。最近、福建省閩候県石山遺跡で発見された斧形貝刀（福建省博物館 1976:105-106）もオセアニアのシャコ貝製斧とは無関係に、この地でつくられたものであろう。

結語

オセアニアにはシャコ貝製斧が広く分布しており、最近の研究はその起源地としてフィリピンが有望視されるにいたっている。

一方、南島、特にその南部圏に位置する石垣島出土のシャコ貝製斧は、ちようつかいの部分に用いている点、その結果必然的に生じるのであるが、その形態から見た場合、フィリピンのバラワン島出土の前期新石器時代のもの（Fox 1970:Fig. 19, a, b）に酷似している。しかし、現在、フィリピン及び南部圏の考古学的発掘調査は充分な比較が可能な程度にまではなされていない。従って、現在の段階では、両者が系統的に親縁関係があると断定することは出来ない。特に、両諸島に位置する台湾に類例のないのは一寸気にかかる。とはいえ、石器を製作する上に充分な石の存在する石垣島において、敢えてシャコ貝製斧が、石斧と共に製作されたということは、それがフィリピン（或いは可能性はより少ないがミクロネシア方面）からの影響に起因する蓋然の高いことを示している。その場合は、なんらかの事情により、台湾を経由しないで、フィリピンから伝わつたのであろう。他の文化要素中に類似点がないようであれば、漂流民などによって伝えられたのかもしれない。なお、両者間の距離の長い点は、オセアニアにおける文化伝播の事例からながめた場合、それほど問題にすべきことではない（勿論、海流の問題も考慮しなければならないのであるか）全ては今後の発掘調査の成果、及び南島考古学者達によるシャコ貝製斧の製作方法などの徹底的

研究に期待する他ないことを明記し、擲筆する。

最後ではあるが、本稿を草するにあたり文献の入手に際し、大変お世話になったビショップ博物館の篠遠喜彦博士、アイオワ大学のR. シヤトラー博士、ピットバーグ大学のA. Spoehr博士、オーランド大学のR. グリーン博士、オーランド博物館のJ. デヴィドソン博士、慶應大学の近森正、鈴木公雄両助教授に深くお礼申し上げたい。

引用文 献

青柳洋治

1973. 「フィリピンに於ける近年の考古学的活動」上智史学 18 : 83-91。

1976. 「フィリピン先史時代の遺跡」えとのす 6 : 16-171。

安里嗣淳

1975. 「沖縄考古学についての二、三の感想」南島考古 4 : 97-101。

福建省博物館

1976. 「閩候県石山遺址第六次発掘報告」考古学報 1976-1 : 83-119。

神沢勇一

1973. 「問口洞窟遺跡（本文編）』神奈川県立博物館発掘調査報告 7。神奈川県立博物館。

国分直一

1955. 「アンガウル島出土の貝斧」農林省水産講習所研究報告 1 : 11-13。

1966. 「南島の先史土器」考古学研究 13-2 : 31-40。

1968. 「南島先史時代の技術と文化」史学研究 66 : 1-41。

1972. 『南島先史時代の研究』東京。

1973a. 「南島古代文化の系譜—先史時代の深さ・海上の交渉をめぐって—」国分直一・佐々木高明編『南島の古代文化』東京。

1973b. 「那覇ゆうな荘（1972年12月14日）における集会報告と追考」南島考古 3 : 26-9。

国分直一他

1959. 「奄美大島の先史時代」九学会連合奄美大島共同調査委員会編『奄美—自然と文化—』 : 196-271。東京。

コルフマン, M,

1973. 「古代の『ミサイル』—投石器」サイエンス 3 (12) : 85-94。

村主岩吉

1943. 「クサイ島レロ遺跡概要」科学南洋 5 (2) : 71-81。

爾津正志

1945. 『太平洋の古代文明』東京。

大浜永亘

1975. 「八重山石垣島の新石器時代無土器遺跡」南島考古 4 : 71-82。

玉口時雄

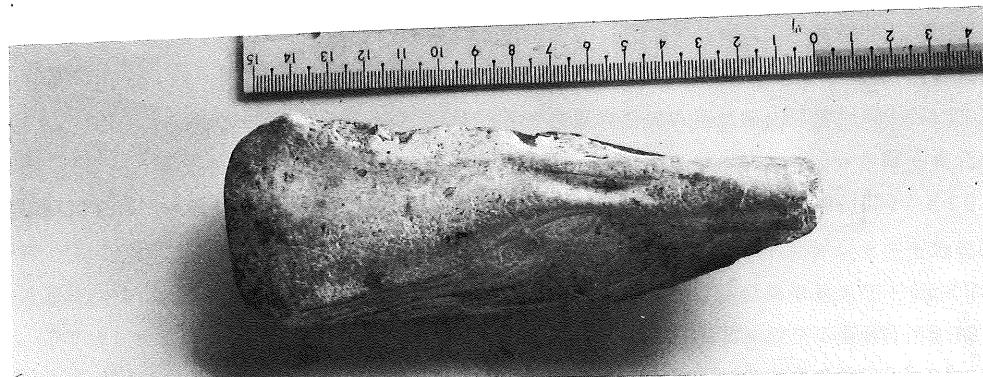
1960. 「石垣島<山原貝塚>」滝口宏編『沖縄・八重山一早稲田大学八重山学術調査団
(第一次報告)』：100－173。東京。

多和田真淳他

1962. 「地荒原貝塚発掘報告」文化財要覧1962年版、琉球政府文化財保護委員会
：63－74。

八幡一郎

1943. 『南洋文化雑考』東京。



シャコ貝製斧・八重山名蔵出土
(沖縄県立博物館蔵)

- Birket-Smith, Kaj
1956. An ethnological sketch of Rennel Island, a Polynesian outlier in Melanesia.
K. Danske Vidensk. Selsk. Hist. Filol. Meddr. 35 (3).
- Buck, Peter
- 1932a. Ethnology of Tongareva. B. P. Bishop Museum. Bulletin 92. Honolulu.
- 1932b. Ethnology of Manihiki and Pakahanga. B. P. Bishop Museum. Bulletin 99. Honolulu.
1950. Material culture of Kapingamarangi. B. P. Bishop Museum .Bulletin 200. Honolulu.
- Chang, K. C.
1969. Fengpitou, Tapenkeng, and the prehistory of Taiwan. Yale University Publications in Anthropology 73. New Haven. .
- Chikamori, M. (ed.)
1975. The early Polynesian settlement on Rennel Island, British Solomon Protectorate: Preliminary report, 1974. Department of Archaeology and Ethnology, Keio University. Tokyo.
- Christian, F. W.
1967. The Caroline Islands: Travel in the sea of the little islands. New impression. Edinburgh.
- Damm, Hans
1938. Zentralkarolinen 2. Ifaluk-Aurepik-Faraulip-sorol-Mogemog. ESSE II B 10 (2). Friederichsen, de Gruyter, Hamburg.
- Davidson, Janet M.
1968. "Nukuoro: Archaeology on a Polynesian outlier in Micronesia." in Prehistoric culture in Oceania. Edited by I. Yawata and Y. H. Sinoto: 51-66. Bishop Museum Press.
1971. Archaeology on Nukuoro Atoll: A Polynesian outlier in the eastern Caroline Islands. Bulletin of Auckland Institute and Museum 9. Auckland.
- Duff, R.
1967. "Neolithic adzes with differentiated butt, in South China, South-East Asia and Polynesia." Symposium on historical archaeological and linguistic studies on South-East Asia and the Hong Kong region:1-14. Hong Kong University Press.
1970. Stone adzes of Southeast Asia: An illustrated typology. Canterbury Museum, Bulletin 3. Christchurch.
- Edge-Partington, James

1895. An album... of the natives of the Pacific Islands. Second Series. Issued for private circulation by James Edge-Partington and Charles Heape.
- Eilers, Anneliese
1936. Westkarolinen 2. Tobi und Ngulu. ESSE II B 9 (2). Friederichsen, de Gruyter, Hamburg.
- Emory, K. P.
1934. Archaeology of the Pacific Equatorial Islands. B.P.Bishop Museum. Bulletin 123. Honolulu.
1975. Material culture of the Tuamotu Archipelago. Pacific Anthropological Records 22. Department of Anthropology. B. P. Bishop Museum.
- Finisch, O.
1888-1893. Ethnologische Erfahrungen und Belegst ücke aus der Südsee... Annln. K. K. naturh. Hofmus. Wien.
1914. Südseearbeiten. Gewerbe-und Kunstfleiss, Tauschmittel und "Geld" der Eingeborenen ... abh. hamburg. KolonInst. XIV B. 9.
- Firth, Raymond
1959. "Ritual adzes in Tikopia." in Anthropology in the South Seas. Edited by Freeman, J. D. and W. R. Geddes: 149-159. Avery, New Plymouth.
- Fox, R. B.
1970. The Tabon Caves: Archaeological explorations and excavations on Palawan Island, Philippines. National Museum, Monograph 1. Manila.
- Garanger, Jose
1968. Herminettes oceaniennes, elements de typologie.
Centre de Recherches Prehistoriques et Proto-historiques. Paris.
1972. Archeologie des Nouvelles-Hébrides. Paris: Office de la Recherche Scientifique et Technique Outre-Mer.
- Gifford, E. W.
1951. Archaeological excavations in Fiji. University of California Anthropological Records 13 (3).
- Gifford, E. W., and R. Shutler, Jr.
1956. Archaeological excavations in New Caledonia.
University of California Anthropogical Records (18) 1.
- Gifford, E. W., and D. S. Gifford
1959. Archaeological investigations in Yap. University of California Anthropological Records 18 (2).
- Golson, J.

- 1972a. "Both sides of the Wallace Line: New Guinea, Australia, Island Melanesia, and Asian prehistory." in Early Chinese art and its possible influence in the Pacific Basin. Edited by N. Barnard, vol. 3: 533-595. New York.
- 1972b. "The Pacific islands and their prehistoric inhabitants." in man in the Pacific islands. Edited by R. G. Ward: 5-33. Oxford: Clarendon Press.
- Green, R. C.
1972. "Aspects of the Neolithic in Oceania: Polynesia." See N. Barnard (ed.): 655-691.
1974. "Excavation of the prehistoric occupations of SU-Sa-3." in Archaeology in Western Samoa. Edited by R. C. Green and J. M. Davidson, vol. 2: 108-154. Bulletin of the Auckland Institute and Museum. 7.
- Humbruch, Paul
1908. Wuvulu und Aua (Maty-und Durour-Insel n). Mitt. Mus. Volkerk. Hamburg.
1915. Nauru subvol. 2. ESSE II B I (2). Friederichsen, Hamburg. 1936. Ponape 3. Die Ruin, Ponape Geschichten. ESSE II 7 (3). Friederichsen, de Gruyter, Hamburg.
- Heine-Geldern, R.
1932. "Urheimat und früheste Wanderungen der Austronesier." Anthropos 27(3, 4): 543-619.
- Kennedy, D. G.
1931. Field notes on the culture of Vatupu, Ellice Islands. Memoirs of the Polynesian Society 9.
- Kirch, P. V., and R. H. Rosendahl
1973. "Archaeological investigation of Anuta." in Anuta: A Polynesian outlier in the Solomon Islands. Edited by Yen, D. E. and J. Gordon: 25-108. Pacific Anthropological Records 21.
- Krämer, Augustin and Hans Nevermann
1938. Ralik-Ratak (Marshall Inseln). ESSE II B 11.
- Lampert, R. J.
1968. "An archaeological investigation on Ocean Island, Central Pacific." Archaeology & Physical Anthropology in Oceania 3 (1): 1-18.
- LeBar, Frank M.
1964. The material culture of truk. Yale University Publications in Anthropology 68. New Haven.
- Macgregor, G.
1935. Notes on the Ethnology of Pukapuka. B. P. Bishop Museum Occasional Papers 11 (6).

- Matsumura, A.
1918. Contributions to the ethnography of Micronesia. *Journal of the College of Science, Tokyo Imperial University*. Vol. 40, Art 7.
- Kokubu, N., and E. Kaneko
1963. "Ryukyu survey 1962." *Asian Perspectives* 6 (1-2): 77-162.
- Osborne, D.
1966. The archaeology of the Palau Islands. *B. P. Bishop Museum Bulletin* 230.
- Pearson, R. J.
1969. Archaeology of the Ryukyu Islands. *University of Hawaii Press*.
- Pellet, M., and A. Spoehr
1961. "Marianas archaeology: Report of an excavation on Tinian." *Journal of the Polynesian Society* 70: 321-325.
- Poulsen, J.
1966. "Preliminary report on pottery finds in Tonga." *Asian Perspectives* 8 (1): 184-195.
1970. "Shell artifacts in Oceania: Their distribution and significance." *Pacific Anthropological Records* 11: 33-46.
1972. "Outlier archaeology: Bellona: A preliminary report on field work and radiocarbon dates." *Archaeology and Physical Anthropology in Oceania* 7 (3): 184-205.
- Rogers, G.
1974. "Archaeological discoveries on Niuatoputapu Island, Tonga." *Journal of the Polynesian Society* 83 (3): 308-348.
- Rolston, R.
1945. "Notes on some Melanesian woodworking implements." *Journal of the Polynesian Society* 54 (4) 212-217.
- Rosendahl, Paul
1969. Micronesian shell adzes: A preliminary terminology and classification. Type-script. Anth. 450, Dr. Mason Museum Project.
- Rosewater, J.
1965. "The family Tridacnidae in the Indo-Pacific." *Indo-Pacific Mollusca* 1 (6): 347-396.
- Shutler, R., Jr.
1967. "Radiocarbon dating and man in Southeast Asia, Australia, and the Pacific." *Asian and Pacific Archaeology Series* 1: 79-87.
1970. "A radiocarbon chronology for the New Hebrides." *Proc. 8th Int. Congr.*

- Anthrop. Ethnol. Sci. III: 135-137.
- Shutler, R., Jr., and Jeffrey C. Marck
1975. "On the dispersal of the Austronesian horticulturalists." Archaeology & Physical Anthropology in Oceania 10 (2): 81-113.
- Shutler, M. E., and R. Shutler, Jr.
1965. A preliminary report of archaeological explorations in the Southern New Hebrides, 1963-1964. B. P. Bishop Museum, Department of Anthropology. Spec. Pub.
- Shutler, R., Jr., and M. E. Shutler
1975. Oceanic Prehistory. Cummings Publishing Company.
- Sinoto, Y. H.
1975. "Report on the preliminary excavation of an early habitation site, on Huahine, Society Islands." Journal de la Societe des Oceanistes. Extrait du numero Tome xxxi: 143-186
- Solheim, W. G., II.
1975. "Comment of Prehistory of Oceania by P. Bellwood." Current Anthropology 16 (1): 23.
- Specht, J. R.
1969. Prehistoric and modern pottery industries of Buka Island. T. P. N. G. Unpublished PhD thesis, A. N. U., Canberra.
- Spoehr, A.
1957. Marianas prehistory: Archaeological survey and excavations on Saipan, Tinian, and Rota. Fieldiana: Anthropology 48.
1973. Zamboanga and Sulu: An archaeological approach to ethnic diversity. Department of Anthropology, University of Pittsburgh, Ethnology Monographs 1.
- Stephen, B., and R. C. Green
1975. Workingpaper of the Southeast Solomon Islands culture history project. Radiocarbon dates from the British Solomon Islands to December 1973, 30. Department of Anthropology, University of Auckland. Private Bag.
- Takayama, J., et al.
1971. Archaeology on Rota in the Marianas Islands; Preliminary report on the first excavation of the latte site (M-1). Reports of Pacific Archaeological Survey 1.
1973. Preliminary archaeological investigations on the Island of Tol in Truk. Reports of Pacific Archaeological Survey 2.
1976. Archaeological excavation of latte site (M-13), Rota, in the Marianas. Reports

of Pacific Archaeological Survey 4.

Thompson, L. M.

1932. Archaeology of the Marianas Islands. B. P. Bishop Museum Bulletin 100.
1938. "Adzes from the Lau Islands, Fiji." Journal of the Polynesian Society 47:
97-108.